他者との相互作用を通じた質問態度の向上(3)

道田 泰司

(琉球大学教育学部)

キーワード: 批判的思考, 質問力, 学習者間インタラクション

Improvement of the attitude toward questioning through small group interaction (3)

Yasushi MICHITA

(Faculty of Education, University of the Ryukyus)

Key Words: critical thinking, questioning, between-learners- interaction

目 的

本研究の目的は、質問力向上を目指した授業実践(教科研, 2011)で、どのような学習者間インタラクションが行われ、学生の質問力向上に関係しているのかについて検討することである。道田(2012, 日心)では、あるグループにおける発話のありようを検討することで、事前の質問態度が低い学生が回を追うごとに参加していく様子を報告した。道田(2013, 教心)では、質問態度が比較的向上していた3チームに焦点を当て、話し合いの流れを分節化することで、初回と最終回で話し合いのあり方がどのように変化しているのかについて検討した。ただしそこで3チームに共通してみられた変化が、前年度の実践では当てはまらないことも見いだされた。

本研究では、集団に焦点を当てるのではなく、事前-事後テストで質問力が大きく向上していた学生に焦点を当て、彼女が所属するグループでどのような話し合いが行われており、当該学生が毎回の話し合いにどのように参加しているかを検討することで、学生の質問力向上に寄与する学習者間インタラクションのあり方を検討することを目的とした。

方 法

授業と受講生 2013年度前期の教職専門科目「教育心理学」でデータを収集した。受講生は教育学部の2・4年次93名であった。1回目(事前)と14回目(事後)に、質問に対する態度調査(6項目)と質問力調査(千字程度の文章に対して質問を出させる)を行った。

データ収集 全19グループ中6グループ(計30名)の質問生成のための話し合いを録音した。また前期終了前に、録音対象グループメンバーの一部を対象に、質問態度や質問生成数が事前-事後で変化したものの理由を、インタビューを通して聞き取った。

結 果

事前テストと事後テストで、全受講生の質問生成数の平均は事前2.8個、事後4.6個、質問に対する態度の平均は、事前25.5点、事後26.8点であった。その中で質問生成数(0個→4個)ならびに質問に対する態度(19点→23点)に比較的大きな変化がみられたNのグループに焦点をあてることとした。

事後のインタビューでNは、疑問が出しやすくなったことについて、次のように語っていた。

- ・ **人の疑問を聞いて**、確かにここはあいまいだな、こういうことに疑問を持ってもいいんだ、という気持ちになった
- ・ 質問したら**答えてくれたり**、考える手助けになる助言はもらえるので、わからないことがあったら聞いたほうがいいと思った
- ・ 質問を考えると、自分のなかでまとめきれないことがあ

あったが、**友達の説明を聞いて**、質問を考える位置につけた

- ・ 4月(事前テスト)は読んでいても、どうしようどうしようかと焦り、**どこに疑問を持てばいいんだろう**、と書けなかった。事後テストでは、なんでもいいと言われたので、とりあえず疑問に思ったことを書こうと思った。
- ・ 前は(文章を)表面的に読んでいたが、**本当にちゃんと理解しないと人に伝えられないと思うようになった**
- ・ **自信はない**。小さいころからそうだった。
- ・ グループでの話し合いも、**いつも自分が、ここはなんでこうなの?と聞いて**、CとかYがここはこんななんじゃない?と(答えを)いうことに對して乗っかる感じで意見をいって質問を作る感じだった

ではここに挙がっているような「人の疑問を聞く」「質問に答えてもらう」「友達の説明を聞く」ようなことは、毎回の話し合いではどのように行われていたのだろうか。

初回の話し合いでは、他メンバーからまず、「(発表内容の)意味が理解できなかった」と不理解を表明する発言と質問があり、その質問に使われていた用語に対してNも質問を行った。それは他メンバーによってすぐに返答されたが、さらにNが出した素朴な疑問に対して、他メンバーも同意を示した。その後、他者の話に刺激を受けて質問をいくつか行い、それが最終的にグループの質問となった。

また、Nの発言が比較的多かった第4回の話し合いでは、最初は「今日は難しいね」と言って他者の話し合いを聞いていたものの、意見が分かれた局面で自分なりの考えを出し、またそれが他者に同意されていた。その後の話を通して、Nが素朴な疑問を出し、それが他者の同意を得て、グループの質問となっている。

逆に、Nの発言が少なかった第5回の話し合いでは、Nが「難しい。なんか理解できない。どうしよう」と発言したのに対して、Jに「うーん。でも、わかりやすかったんじゃない?」と返答されている。また、相対評価の解釈について意見が分かれた時、Nも意見を出しているが、その後に論点が変わってその話がうやむやになった。その後Nは単発的な同意や情報提供発言に終わってしまっている。

考 察

以上の事例から考えるなら、話し合いの中で、他者が不理解を表明したり疑問を出すなど、他人も理解できていないことを知ること、自分の疑問に答えてもらうことで理解が深まり、更なる疑問が生まれること、自分の疑問や考えに同意されることで自信が出ることなどが、Nにとって発言や疑問生成につながり、最終的には一人でも疑問が出せることにつながったのではないかと考えられる。